万葉集「石見相聞歌」 江津ゆかりの地



「屋上の山」と伝わる室神山

通称「浅利富士」といわれ、市民に親しまれている。



「渡りの山」

「渡りの山」は江の川河口東岸の小高い山々であったと言われている。



「辛の崎」にある石見大崎鼻灯台より高角山を臨む。

手前の海岸は、角の七浦とよばれている。（波子・敬川都野津・和木・嘉久志・江津・渡津の海岸を総称）



和多津の荒磯

江の川河口東、渡津の海岸。地元ではこの周辺の海岸を「荒磯」とよんでいる。



恵良の里

人麻呂の妻、依羅娘子が住んだと伝わる。遠くに高角山が見える。

長　歌（万葉集 巻二 一三一）

石見の海　角の浦廻を
浦なしと　人こそ見らめ
潟なしと　人こそ見らめ
よしゑやし　浦はなくとも
よしゑやし　潟はなくとも
鯨魚取り　海邊を指して
和多津の　荒磯の上に
か青なる　玉藻沖つ藻
朝はふる　風こそ寄せめ
夕はふる　浪こそ来寄れ
浪の共　か寄りかく寄る
玉藻なす　寄り寝し妹を
露霜の　置きてし来れば
この道の　八十隈毎に
万たび　かへりみすれど
いや遠に　里は放りぬ
いや高に　山も越え来ぬ
夏草の　思ひ萎えて
偲ふらむ　妹が門見む
靡けこの山

反歌二首

石見のや　高角山の　木の間より　我が振る袖を　妹見つらむか（巻二・一三二）

現代語訳（石見の、高角山の木の間から私が振る袖を、妻は見たであろうか）

笹の葉は　み山もさやに　さやげども　吾は妹思ふ　別れ来ぬれば（巻二・一三三）

現代語訳（笹の葉は、山全体にサヤサヤと音を立てているけれども、私は一心に妻の事を思う。別れて来てしまったので）

長　歌（万葉集 巻二 一三五）

つのさはふ　石見の海の
言さへく　辛の崎なる
海石にそ　深海松生ふる
荒磯にそ　玉藻は生ふる
玉藻なす　靡き寝し児を
深海松の　深めて思へど
さ寝し夜は　幾だもあらず
はふ蔦の　別れし来れば
肝向かふ　心を痛み
思ひつつ　かへり見すれど
大舟の　渡の山の
黄葉の　散りの乱ひに
妹が袖　さやにも見えず
妻隠る　屋上の山の
雲間より　渡らふ月の
惜しけども　隠らひ来れば
天伝ふ　入日さしぬれ
大夫と　思へる吾も
敷妙の　衣の袖は
通りて濡れぬ

反歌二首

青駒の　足掻きを速み　雲居にそ　妹があたりを　過ぎて来にける（巻二・一三六）

現代語訳（青駒の歩みが速いので、遥か雲のかなたに妻の家のあたりを過ぎて来てしまったことだ）

秋山に　落つるもみち葉　しましくは　な散りまがひそ　妹があたり見む（巻二・一三七）

現代語訳（秋山に散り落ちるもみじ葉よ。しばらくは散り乱れてくれるな。妻の家のあたりを見よう）





監修 / 川島　芙美子

制作 / 江津市観光ボランティアガイドの会